The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	城崎の温泉寺と香住の応挙寺
Author(s)	源, 豊宗
Citation	懐徳. 1936, 14, p. 39-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88950
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

城崎の溫泉寺と香住の應擧寺

源　豐　宗

雪は夜久野あたりから、次第に深くなつてゐた。城崎驛のフォームの驛名標は半ば雪に埋れてゐた。——それは昭和八年二月のはじめである。私は大阪女專の國文科の旅行に伴いて來たのであつた。

私達が、溫泉寺へ出かけて行つたのは、もう夕方の五時近くであつた。日が幾らか永くなつたと云つても、五時にもなれば、あたりが薄暗くなる時節である上に、ひどい雪空になつて、實はもうものを見る時刻ではなかつた。

雪に埋れた長い阪道を、あへぎつゝ上つて來た生徒達は靴下まで濡れとほして、寺に着くと、先づ見つけた庫裏の圍爐裏の赤々と燃えてゐる火に吸ひつけられて、心の底まで暖めて呉れる樣な榾火と、珍らしい圍爐裏とから中々離れさうにもしなかつた。

間もなく寺僧の案内で持佛堂の本尊千手觀音から拜んで行つた。厨子の中に垂れた御帳をかゝげると凡そ四尺五寸ばかりの黑ずんだ像が立つてゐた。私の持つて行つたエバーレディの照明にてとも角

もその形を見る事が出來た。高さに比して頭部の稍大きい、且つ胴の太い、と云つてプロポーションが惡いといふ程でもない、むしろガッチリした感じを與へる像であつた。見る所、楠の一木彫成であるが、衣文は極めて淺く、すでに藤原化してゐるのが充分に感じられた。その裳の裏返りの大きく長く前に垂れて、形のとゝのつた形式も藤原のものである。下から仰ぎ見るせいでもあるが、その小さな口の下の小顎も小ぢんまりして、全體の顏をやさしく愛らしく見せてゐるのを覺えた。此の像の特殊な技法は、十一面の化佛が、頂上の彌陀の首を除く外は十個何れも前半面に一列に連接して、一木より彫出されてゐる事であつた。手は勿論數へる事は出來得べくもなかつたが、或は最初千本作られてゐたかとも思はれる程、夥しい手が密集して翼の樣にうしろをおほふてゐた。

それから足利の建立と稱せらるゝ本堂に足を運ぶ。外の緣側には先年の大地震の時の慘ましき記念品、灰燼中より拾ひ來つたと覺しき時計のへしまげられた機械部、熔け塊つた硝子、といふやうなものがまざ〳〵と、當時の慘狀を偲ばせて、そこに並んでゐた。本尊は祕佛で、見せては貰へなかつたが、これはかねて修理の時に寫した寫眞を、M君から以前に送られたのを見ると、此の像も楠の一木彫らしく、刀法は極めて簡粗で、鉈彫のむしろ原始的形態とも考へられ、大小の丸鑿を以つて、肌の樣な鄭寧を要する部分は細かく、然らざる所は荒く之れを行つてゐるのがわかる。それだけに表現に生々した所がある。然し全體の表現としては必ずしも粗野でなく、むしろ優雅な趣をさへ感じさせて

ゐる。しかも衣文は翻波的な鋭どさとふくらみとを持ち、力を持つてゐる。貫つた寫眞は脚部を缺き、しかも稍側面像で充分その全容を明にし得ないが、腹部が突出してゐるのも殊に注意された。此の腹の突出してゐるのは同じく兵庫縣氷上郡葛野村の達身寺の佛像にも見出される特色であるが、此の像の全體の表現に、何處か達身寺の像に類似したものが感じられない事はない。時代は恐らく貞觀末といふ所であらう。此の本尊の前立の約三尺の觀音の像は多分杉材らしく、これも一木で腹部の稍突出してゐるのが――著しく磨損してはゐるが――注意される。左右に垂れた拙劣な修補の天衣が甚しく此の像の尊嚴を害つてゐるが、それは貞觀時代に上り得べきしつかりした所を帶びてゐる。その左右に四天王が安置されてゐた。觀心寺の四天王を思はせる樣な、がつしりした中々力のある表現であるが、全體として鈍重な感を免れない。刀法なども粗末である。本尊とほゞ時代は同じ樣である。同じく本堂に並んでゐた役の行者と前鬼後鬼との彫刻は此の種類のものとしては出來がよく、多分足利中期には上れさうにも思へた。內陣のうしろに陳列されてゐる佛像佛畫は數こそ澤山であるが、注意に値するものは彫刻では、藥師像兜跋毘沙門像男女神像等、繪畫では國寶の十六善神像、康曆といふ十二天像、明德四年の奧書ある粉本などである。

藥師像は二尺餘の坐像で一木作り、衣文は淺いが翻波の形式が殘つてゐる。肉髻は高く螺髮は切付であるが非常に粗く、顏も頗る森嚴な趣があつて溫泉寺の佛像として最も貞觀的表現を帶ぶるもので

ある。膝の高いのも此の像の險しさを助長するものである。兜跋毘沙門は兩手を缺いてゐるが、歡喜天女の肩に乘り、鎧は大分普通の毘沙門の樣に複雜になつてゐるが、それでもなほフロックコートの樣に長く垂れたのをまとひ直立正面してゐる。冠も型の如くであるが、鳳凰の形は見えない。然し歡喜天が普通は兩掌を以つて毘沙門の兩足を受けてゐるのに對し此の像では肩に之れを受け、兩手は合掌してゐるのが特に珍らしい。之れも先づ貞觀末といふ所である。此の溫泉寺の佛像は、持佛堂の千手はとも角として、大體に於いて貞觀末の樣式を帶ぶるものがその大部分を占め、本堂の外陣の長押上の棚にも置かれた數十の剝落磨損した佛像も、何れも同じ類のもので、それ等の中には十二神將の樣なものも見受けられ、大した樣式的へだゝりは見られなかつた。中にも天平の觀音と說明してある勇猛形の如き、之れも兩手を缺いでゐるが、かの藥師寺の四天王の藤原初期と思はれるものに似たもので（尤もかの像の如く精細にして熟練した技巧と表現とはないが）力のある表現をもつてゐた。これ等の樣式より見て、實際の年代を考へるとなると、私はむしろ一般に藤原初期といふ頃になつたものと見たい。卽ち中央におくれて舊い樣式が殘存してゐた地方美術の狀態を示してゐるものと思はれるのである。

然し私には神像の二體が殊に興味が深かつた。男神像は冠をつけ長い顎髯を垂れ兩手は袖の中で合せて居る。衣のひだは簡潔であるが比較的整つてゐるのを覺えた。女神像は寶珠樣の小さな髻を結び

飾襟のある衣をつけ、兩手は男神像と同じ姿勢である。何れも坐像で一尺四五寸程の小像である。顔の表現は女神像の如き頗る愛艶な趣を帶び一寸藤原時代の女性の天部像を思はしめる節がなくもないが、よく見ると藤原程の氣品がなく、人間的感情が濃かで、どうしても鎌倉時代に下るものである事を思はしめる。男神像もさうである。服裝などでも稍佛教臭くなつて來て藤原時代のそれの樣に純然たる古樣（古樣といふのは藤原の神像はその服裝が唐式の服制から來てゐて、純然たる和樣とは云へないからである）ではない。これ等の像は、溫泉寺の四所權現を現はすものと思はれる。

國寶の十六善神像は剝落も著しく、時代も鎌倉末期のもので、繪としては必ずしも勝れたものとは思へない。然し本尊の服裝など明かに宋風になつてゐるが、佛畫としての技法はむしろ傳統的な點が看取せられ、圖中の羅漢には、かの東大寺の法相曼荼羅を思はせる樣な點がある。十二天像は東寺の勝賀筆のそれの形式で、例の粗い絹に託摩風の描線で描いたもので、その線も中々しつかりしたものであつた。彩色は剝落してもゐるが、大體に淡泊なものである。此の種の十二天の中では矢張いゝものと云つてよからう。尙不動の立像で妙澤風なのがあつた。應永に此の溫泉寺の常什とした事が記してあつて注意すべきものである。明德四年の粉本は時間がなくて展げて見る事は出來なかつたが、馬鳴菩薩等の圖があつて、その描線は流石に鎌倉のに見る樣な暢達した力のあるのとは異り、鈍く弱くなつてゐるのは詮ない事である。その外海北友松の孫友竹筆の城崎の全景圖がある。城崎の江戸中期

の狀景が知られると共に一種の大和繪風なその描寫に友松派の線の藝術の一面が知られて興味がある。

かうして凍つた樣な本堂の夕方の空氣の中で拜見してゐる中にすつかり足が冷えて了つて、私達も庫裏に急いで戻り、圍爐裏のはたに腰をすゑて、もえ上るほのほに照り映えつゝ足や手をかざしたのであつた。このゐろりは北國の私の國などのとは異り、割合に淺くて小さい。然し大阪育ちの娘達には、ゐろりといふものが珍しい上に、此の雪に埋れた寺の庫裏に勢よく燃え立つ焰の、ナイーブな、しかもなつかしみに充ちたものに、深い感興を覺えずに居れなかつたのである。私達はふたゝび、時折氣味惡い音を立ててくづれ落ちて來る梢の雪を氣にしながら、雪の阪道を下つて宿に戻つた。宿にはちやんと炬燵が用意してあつた。

翌朝七時五十一分、からうじて漸く香住行きの汽車に間にあつた。城崎の町のはづれのトンネルを越えると、間もなく沈痛な蒼さを湛へた日本海が見え出す。寄せては白く碎け散る潮騷の光景も冬の淋しき山陰の姿であつた。海に近くても、流石に山陰に入つて來ただけに、雪は一層深くなつて來た。見渡す限り白皚々たる雪の景色である。桑畑は僅にその梢を雪の表に並べてゐる。その雪のおもてを一羽の眞黑な鴉が餌でもさがすやうに歩いてゐるのが目にたつた。

香住で、此の雪の山陰道を西の方遠く馳せて行く汽車に別れて、應擧寺に向ふ。道はほゞ半道、い

つもはバスが通つてゐるのであるが、此の深い雪道ではバスなど思ひもよらぬ事で、僅かに踏み固められた一筋路をやゝもするとふみはづして雪の深みに足を突き込み、吹きつける雪の中を三十幾つの人影が一列になつて進んで行くのであつた。やがて道ばたの小川に架せられた橋を渡ると、石段の上に大きな楠の木に覆はれて大乘寺の山門が仰がれた。境内には大雪にしたゝか折りちぎられた楠の小枝が、雪の中にその固い黑ずんだ緑の葉を半ば埋めて散亂してゐた。本堂の軒下には板で雪圍がしてあつて、いかにも陰氣な冬の寺であつた。まつ白な雪路を歩いて來て極度にしぼんだ瞳孔は、此の雪圍のしてある薄暗い寺の中に入るとしばらくはまつ暗で何も見る事が出來なかつた。たゞ赤々と燃えてゐる圍爐裏の焰のみがなつかしく眼に映つた。然し吾々が此の寺で持ち得る時間は一時間に過ぎなかつた。住持の出さるゝお茶もそこ〳〵に、先づ襖繪を見せて貰ふ事にした。

吾々は先づ源琦の描いた梅に鴨の圖の部屋から見せて貰つた。これは今咲き誇つてゐる池塘の老梅の下に群鴨の遊游せる圖である。濃淡の墨で錯綜せる梅の枝の遠近を現はしてゐるのは圓山の常套であるが、その沒骨で揮灑した樹幹の表現にも、必ずしも梅の持つ嬰鑠たる風骨は出てゐないが、その群鴨の水中に游げる生態の描寫には、流石に寫實のうまみが現はれてゐるのを覺えた。此の襖は隣室の芦雪の間と共に本堂とは別棟の庫裏の二階であるが、應擧が三回にわたつて描いたその第一回には、源琦と芦雪とをつれて來たと思はれる。二人は四十一歳と三十三歳とであつた。其の時彼等は此

の庫裏の二間を描いたものと考へられる。此の鴨の間の長押上の小さな欄間に山口素絢の胡蝶の飛びちがふ圖が描かれてゐる。これはその仕事の位置より考へても第一回の製作とは考へ難く、芦雪の間の長押の上は森徹山の山雀の圖であるが、恐らく同時の仕事であつたであらう。本堂の孔雀の間は此の寺に於ける應擧の最後の作品であるが、その寛政七年には徹山は廿一歳であるから其の時に來て描いたものかも知れない。若しさうすると素絢は三十七であつた。尤も素絢の胡蝶は、畫題からも、その派手な色からも來るのであるが、非常に若やかな氣がするのに、徹山のは水墨である爲めか老成の感がある。これは或は徹山が應擧の歿後に來つて筆をとつたといふやうな事がないとも限らない。しかし素絢の胡蝶は、當時としては餘程清新な取扱として恐らく彼自らも頗る得意とした所であらう。蝶ばかり樣々な蝶を寫生的に描いた者は彼以前には殆んど見當らない。隣室の芦雪の間は芦雪の才氣と手腕とが充分に發揮されたものである。猿の毛描きなども、狙仙などの樣な綿密な精緻なやり方と異り、簡潔に水墨にてあの猿公の柔軟な毛皮を寫し出してゐる。殊に猿が水を泳ぎ乍ら岩の上の仲間を顧みてゐる所などは、彼が鳥獸戲畫から何かヒントを得て居りはしなかつたかとさへ思はれるのである。たゞ右の端の山や篁などの描寫には、圓山派でも殊に芦雪のたつぷりした墨線が、山なり竹なりの勢を示すには悠長に過ぎ、反つて墨の重みが目に立ち過ぎる感を禁じ得なかつた。芦雪は時として實に奔放な描寫を示すが、彼は得て墨を豐かに含ませた筆を好み、繪の重くなる事が多い。此の庫

裏の二階に應擧の寫した十六羅漢の屏風一双がある。原本は貫休風のそれで、彼は此の圖に於いて陰影的な隈取と鐵線的描線とを學ばうとしたかに思へる。應擧の畫風を考へる者にとつては之れも重要な資料である。

庫裏を終へて本堂に行く。先づ正面の右方の部屋から見る。こゝには吳春の繪がある。耕作の圖である。右の隅の田を鋤く所にはじまり、種子蒔き、早苗とり、稙り入れ、もみすりに至るのである。吳春の作品中にあつては吳春らしさがよく出て居り、又畫品もあり描寫もすぐれたものである。私は、殊に、大きな柿の木が枝を張つてゐるその下の藁屋で、百姓達が景氣よくもみすりしてゐる最後の場面が、最も佳いと思つた。此の部屋の奥、そこは四方が部屋に取り圍まれた眞暗な部屋で、電灯を照して漸く判るのであるが、吳春の禿山の間と云はれてゐる一室である。これは吳春が蕪村に受けたものをそのまゝ吐出した樣なもので、蕪村の特色の披麻皴の扁頭形の山が、たゞ高低參差として描かれてゐるのである。それには大きな點苔が稍亂用の傾きを示してゐる。然しともかく吳春の出自が非常に明かにされて面白い。何れも、圓山派の寫實的裝飾畫の中にあつて、此の一部屋のみは南畫を以つて異彩を放つてゐる。吳春は天明七八年頃より應擧の門に學んだ樣に考へられるが、彼が此の寺に描いたのは第二回寛政五年でなかつたかと思ふ。本堂の正面中央の間から、左方及びその奥の書院にかけ三室が應擧の筆になるのである。中央の間は彼がその歿前三ヶ月に描いたもので「寛政乙卯初夏寫

平安源應擧」と落欵がある。此の中央の間は金地に墨にて松と孔雀を描いたもので壯重の趣を湛えてゐる。彼が最も得意とせるは松である。狩野派の樣な形式化がなく、爽やかな松が生々と描かれてゐるのである。然し、此の圖を見て私は二條離宮の探幽の松に孔雀の圖を聯想した。此の應擧の描いた松の下に悠然と遊ぶ孔雀の姿態には或は二條城の探幽の圖が反映してゐるのではないであらうか。此の部屋の奥は内陣でそこに十一面觀音が祀られてゐた。高さ約五尺の木像で、色は黑ずんでゐるがもとは漆箔であつたらう。細長い感じを與へる像で、顔も割に小さく胴も細い。何處か感傷的な氣持を帶びてゐる。相好は柔かで溫泉寺のよりもなほ一層美しい。云ふまでもなく藤原時代のものである。此の寺にはなほ二體の國寶となつてゐる佛像があるが時間もなく見せては貰へなかつた。繪葉書で見ると何れも藤原初期頃のものの樣である。

正面の左方の間は、芭蕉の間と稱せられる。金地に彩色の郭子儀と唐子を描いた絢爛なもので、彩色なども非常に鮮やかさを保ち、百四十年の歲月が經たとは思へない程である。之れは彼の人物畫を示すものであるが、此の襖の圖樣には多分に彼が始興や幽汀より學んだものが見られる樣に思はれ、その頃の畫風全體に底力のある感化を與へてゐた光琳派の裝飾主義的精神が看取される。芭蕉や人物の配置にもそれが伺はれると共に、色彩の效果が特に此の畫面では意圖されてゐるのである。唯、彼は光琳一派の樣に、物象を文樣的に取扱はないで、寫實的に描いてゐる所に圓山應擧たる事を示して

ゐるのである。然しこゝにも彼が人物畫に於ける、少くとも郭子儀や唐子の如き空想的人物の描寫に於ける不得手を暴露してゐる。即ちそこに期待さるゝ精神的な表現が缺けてゐるのである。人物の相貌なども俗氣を免れてゐない。芭蕉の葉に唐子をして落書を書かせ、又一人の唐子をして芭蕉の破れめからのぞかせてゐる樣な所に、江戸時代の月並的機智を喜ぶ趣味が語られてゐる。此の室に山樂筆といふ禪宗祖師の所謂禪會圖を描いた水墨減筆の屏風がある。各扇に一人づゝ描いて各扇に題贊がありその中には澤庵の筆もある。山樂の筆とは受け兼ねる節もあるが、大體江戸初期のものとして注目すべきものである。

奥の山水の間は床の間と襖とを通じて同じ一畫面を構成してゐる。落欵によつて天明七年彼が五十五歳の筆である事が知られる。此の寺に於ける彼の最初の作である。これは金地に水墨の山水である。瀟湘八景といふ樣な比較的平遠の景を描いてゐるのであるが、こゝにも彼が新しく學んだ遠近法が、此の平遠の景を新しく取扱つてゐる所に興味がある。近景の松を大きく描き遠景の山や家屋を透視畫的に寫してゐる所などそれである。これはまさしく應擧以前の繪に見られない空氣の深さを立體的に表現した方法だと云へる。戸棚の四枚の小襖には金地彩色の果物が描かれてゐる。愛賞に足る小品である。こゝの床の間に、應擧の王羲之の三幅對をかけて見せて貰つた。左右の幅は虎に龍である。羲之は今蘭亭の記を書かうとしてゐる所である。應擧の落欵の書風等を見ると如何にも蘭亭の法帖を學

んだ樣な趣が明かに知られる。人物畫としての此の繪は決して偉い者でないが、人物畫の取扱として、机に向つて筆を持つてゐるかゝる寫生的な表現に彼自身の美術史的意義が見出される。此の部屋から續く丁度內陣の裏に當る部屋が圓山應瑞の鯉の間である。芦や蘭の生へた池の面を游いでゐる鯉と龜とが描かれてゐる。應擧の鯉がそのまゝこゝに游いでゐる樣な感もある。父應擧の歿する時彼は三十歲だつたのだが、此の圖は第二回か第三回の物と考へられ、獨創的なものはないが、水中の鯉が巧みに描かれてゐる。此の室の隣は山本守禮の梅に狗の圖、紅梅と白梅とが描かれ數多の狗が嬉戲せる圖である。狗は、流石に應擧に於いては、狗の大まかな描寫の中にその愛らしさを捉えてゐるのに對し、彼のは稍こまかに過ぎて、生硬な感じをまぬがれない。更に此の隣が雲亭の群仙の間、その奧の間に龜岡龜禮の仙女舟遊の圖と、山本守禮の少年行の圖とがある。何れも支那的な畫題で、その圖樣も支那風のもので筆は細かい。支那畫の粉本によつたものと思はれる。應擧は歷史畫をあまり描かない畫家であつて、稀にたとへば韓愈流謫の圖などがあつても、それはむしろ雪の風景を描くのが主となつてゐるのであるが、此の守禮や龜禮などの繪は、題材にとらはれて歷史畫を描く事に束縛されてゐる。今まで大まかな圖樣の部屋を見て來た眼には此の終の室に來て、單に畫風が變つたといふよりも、如何にも末期に來たといふ感じがした。吾々はなほ此の寺の好意によつて鯉が瀧を上る例の龍門鯉魚の圖や、柳下狗子の圖などの幅を見せて貰つたりした。以前は此の寺には應擧の書簡も多くあつた筈で

あるが、今は唯何か表裝代受取に關した樣なものが一通あるのみださうである。寺傳によると、應擧が壯年時代の窮乏を援けて呉れた此の寺の密英上人の恩顧に酬ゆる爲めに、上人が此の藍を建立した時、來つてこの寺の繪を描いたと云はれてゐる。然し應擧の傳記には殆んど何等此の事實に觸れたものがない。さういふ意味からも、應擧に關する此の寺の記錄が散逸して了つたのは惜しい事である。

もつとゆつくりこれ等の繪を見てゐたかつたが、時間が許さなかつた。私達は半里の雪道をほとんど驅ける樣にして驛に戻つて來たのであつた。驛の前には年老ひた漁師の婆さんが雪の中で蟹を賣つてゐた。（終）